

# 被男色常習者の話

## 身なりばかりか 気持も女

### 廿めて一夜の こころ妻

古い話からはじめよう。

昭和五年五月という時、四十六年前、まだ面成カツが今宮カツといつてた時代のことで。

風俗取締と性的犯罪予防ということ、オカマのリストが作られた。

も、ヒモカツではオカマとはいわれない。被男色常習者、といつたのだ。

いかめしい言葉、この口おもしろいね。被男色、つまり男色を被るへかけられる方の常習者といふことだろうけれど、被害者

といふ側もある。

でもその被の字を、同じヒダから、て少く書きかえたらどうなるか。

非男色常習者——  
こうなると、早くいえば普通の、オカマを振る気も振られる気もない、女の方がいいよといふ男のことだ。

それでも耳でさけば、ヒダンシヨクジヨウシユウシヤで変りはない。オカマも、普通の男も同じになつてしまふ。

さて、その今宮カツの昭和五年五月の朝、バトシを区切つてあるから、枯い方はとにかくとして、四十七才以上のあかまは入っていない。

ここいらがまたトさつのおもしろいところ、四十六才まではオカマがいはいりけ

、その被害者、た者であるのとは、おんはじけるので、すいぶんちがう。

そうじ。ありませんか。

被男色常習者、つまり男から愛される常習者ということになれば、ほんとうは愛して干ウタイヨと、男のケ区に男に向つてすり寄つてくる常習者へいつてもやる者へてえりけだからね。

同じく被の字が書いても被害常習者とはいわれない。そんなものはいい。けれど被男色常習者はいる。いるからそんな言葉が生ま

はあるまいか。とこちらを考へるけれどね。実際の話、四十六才までは自分のオシリを愛されるのが大好きだ。た男が、今日から四十七才になりました。こんどは普通の男になつて互をカワイがります——こうカンタニに変わるはずがない。

その証拠に釜では現在もう六十才こえてるような女装がいくつも見られる。

ことによつたら、そのなかに、昭和五年の調べのころ、十九かハタチリストにのせられた八十人余りの一人が、六十五、六才でまじ、てる場合もあるだろう。

昭和五年、これは

不景気な年だつた。

前年の「露店、天

皇、天国の記録に

も出てたように、そ

の不景気が戦争にな

つていくのだけれど、

上手にモノをかくし

て、ストリップの舞台

に立、ていたヒトをい

たぞうだ。聞いた話だ

から保証はないけど

今日はやういふムズカシイことはいれない。  
とにかく不景気。

そして昭和六年、まだ満州での戦争は始  
りなかつたといふときに、流行した歌が次のよう  
なものを。

歌の題の下に、最初の文句を書いておくか  
ら、それまで三を思い出したら自分であつた  
てみるといい。

・「天国に結ぶ恋——今宵名残りの 三日月  
も 消えてさなき 相模藩」

・「ビールの泡——ビール会社の エントツ  
みれば めめよめよと 出るけむり」

・「侍ニッポニー——人を斬るのが 侍ならば  
恋の未練が 付せ斬れぬ」

・「酒は涙が溜息が——酒は涙が ためいき  
か 心のうさの 捨てどころ」

あんまりホガラカチ歌はないね。  
そこにもう一つ、こんな歌もはやっただ。

れたしや夜味く ひねく川花よ

男だてらに 男が好きで

三十を作って ウィンク見せて

そ、と呼びます 街の夜

土方恋売 さらりとすてて

紅やオシロイ ひらひらタモト

身なりばかりか 気持も女

せめて一夜の ところ毒

昔、といつてみても同じ昭和のはじめにす  
ぎないが、それでもやっぱり昔にはうがいな  
いとして、なんと昔も今も、世の中は変わっ  
たようであるといふことかと思ふ。この歌、いよ  
もいっばい通用するものね。

だが悲しい感じもあるよ。

仕事がつんとあつて、土方、人夫が引っぱ  
りだつた、三、四年前には、この歌と反対  
におかまの足をまつつもりを現場へ出てた者  
もめりと多かつた。

れたしや夜味く 酒場の花よ  
赤い口々に 帯のたもと  
ネオニライトで 浮かれ踊り  
さのこさみしい なみだ花

女給恋売 さらりとやめて  
可変坊やと 二人のくらし  
抱いて抱かせて 母さんらしく  
せめて一夜を 子供唄

面録八十作詞、塩尻精八作曲のこの歌は知  
てる人多いはず。「女給の歌」という  
そして作曲者は大坂の人だつたそうだが、こ  
の作曲後まもなく死んだ。

ところがこの歌には替え歌がある。  
替え歌のことまで作詞はダメか、不明だ。  
これから書くのだから、最初に作られたま  
まかどうか、よくわかりません。  
るもまあ、読んでみて、よかつたらちよ、  
と歌って下さい。

ぞりやあまあ、堀り方なんぞの役には立た  
ないし、片付け仕事でもあんまりペツとした  
もんじゃなかつたけれど、たしかにこう働い  
て食う気持の連中だつた。

それがこの節はまた逆戻りで、並のアニコ  
よりでかい団体、ヒゲぞうたあとが青々して  
るようなのが、へんてこなドレスを着て立っ  
てる。

本人はいいんだらうさ。  
しかし、見るのがイヤだ。

哀れ、歩いて、ウラくて、それに少し気味  
悪い、そこもあるし——。  
おや？ あんまり好きはな方なの。そんなら  
もうワルク子はやめよう。

——今官署の調査については平井倉太氏の  
「大阪戦時誌」、犯罪科学誌と五年十二  
月を参照。当時の流行歌については所用  
者平氏の「増補日本歌謡集」を参照した。